

85周年記念誌の発刊にあたって

徳島市病院事業管理者 露 口 勝

徳島市民病院は平成25年2月に開設85周年を迎えます。その記念誌の発刊にあたり、編集委員の方々、執筆者ならびに関係各位に多大のご尽力をいただきましたことを厚く御礼申し上げます。

市民病院の沿革によれば、昭和3年2月に市立実費診療所として市役所の隣に初めて開設され、その後市立中洲病院、新蔵の市立市民病院へと発展し、昭和18年に徳島県立医学専門学校の付属病院となりました。昭和20年の戦災で病院は消失しましたが、戦後いち早く復興して北福島診療所、寺島の市民病院、北常三島の市民病院となり、平成20年1月に現在の新病院が完成しました。戦前から存在する徳島で最も古い公立病院として、徳島市民をはじめ地域住民の命と健康を守り、開設から85年という長い歴史を刻んでおります。

新病院は開院から5年目を迎えますが、長年の懸案であった赤字決算からの脱却を目指して、病院全職員が一丸となって医療の質の向上、患者サービスの徹底および経営効率化に努め、病院収支はここ数年何とか黒字基調になっております。そこで、この1年間は市民サービスのために85周年記念事業として、市民公開講座、病院まつり、世界糖尿病デーのブルーライトアップなど各種のイベントを開催し、その一環として85周年記念誌を発刊することになりました。記念誌の主な目的は病院の正確な歴史を記すことにありますが、院内の編集委員会において新病院の今を中心に、これまでの取り組みやこれからについて各診療科や各部署から簡潔に報告してもらうことにしました。戦前から戦後にかけて長い歴史のある市民病院ですが、戦災で資料が散逸し残っていないこともあり、現職員の記憶に残る事柄を主にして、親しみやすい、読みやすい記念誌になるようにと心掛けました。

市民病院は、急性期医療を担う地域の中核病院として、地域医療支援病院、地域がん診療連携拠点病院、地域周産期母子医療センターおよび災害拠点病院の指定を受けております。地域の医療機関との役割分担・連携をキーワードに、一病院でなく地域で完結する医療体制の構築に取り組んでおります。今後は少子・高齢化社会を迎え、医療費抑制政策等で厳しい医療環境が予測されますが、医学の進歩に遅れることなく高度医療機器を導入し、チーム医療を一層推進するなど更なる医療の質の向上に努め、地域住民から信頼され、安心して医療を受けていただける立派な病院にしたいと考えております。

記念誌を発刊して自分たちの歴史を振り返ることは、先人たちの足跡をたどり、将来の方向性を見定める良い指標となります。医療従事者として、この85周年を礎石として新たな気持ちで努力を続け、更なる市民病院の輝かしい歴史を積み重ねていくことが地域医療に貢献する道であると確信しております。